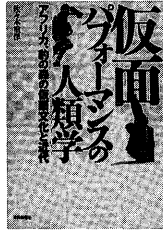


「資料紹介」

佐々木重洋著 仮面パフォーマンスの人類学——アフリカ、豹の森の仮面文化と近代 京都 世界思想社 2000年 382p.



本格的な研究書である。アフリカの仮面に関する人類学的研究と聞いて我々がすぐに思い浮かべるのは、憑依、邪術、儀礼の象徴性、秘密結社など、「アフリカ人の世界観と宗教観」に関するものであろう。西部カメルーンにおける仮面をとりあつかった本書は、そういった従来の仮面研究が重視してきた分野を十分に押さえつつも、これまで注目されてこなかった斬新な視点をもって現代アフリカの仮面文化を捉え直している。

例えば仮面パフォーマンスに刻まれた、個別社会の歴史的経験である。植民地支配や奴隷貿易を経験した西カメルーンでは、仮面を用いた舞踏やパフォーマンスの端々にその記憶が刻まれている。そしてそれは単なる外部世界との接触という歴史事実の記憶ではなく、地域社会の人々が近代という歴史的経験を自分たちの文化の文脈にどう「消化」してきたかを示すものである、と筆者は主張する。

あるいは仮面儀礼の存続を支えている、エンターテインメント的要素の重要性である。これまで憑依や託宣などの仮面パフォーマンスは、その社会的機能や宗教的意義の面から論じられることが多かった。しかし筆者は、これらの「神がかり」を人々が100%信じているから仮面文化が存続しているのではないとする。むしろ、観衆を魅了する仮面パフォーマンスそのものの見事さや娯楽性こそが、仮面文化の存続に大きな役割を果たしていると主張している。

平易な表現と生き生きとした情景描写でアフリカの仮面文化の面白さを伝えてくれる本書は、研究書としてだけでなく読み物としても一級のものである。

(高根 務)

吉田憲司著 文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで 東京 岩波書店 1999年 267p.



3年前、世田谷美術館で「異文化へのまなざし」展を見たときの衝撃は忘れられない。今世紀初頭の大英博物館の日本展示室が再現され、アフリカやオセアニアをモチーフにした日本の漫画が並べられ、ジェット機の形をしたガーナの棺桶が展示され、ニューギニアの雑貨屋と大阪の駅のキオスクがそのままの形で置かれている。展示を見終えたとき、私は心地よく混乱した気分になったことを覚えている。この展示の仕掛け人が本書の著者である吉田氏だった。

文化人類学者の吉田氏はザンビアでの長期の調査に基づき、仮面や秘密結社に関する優れた研究を発表してきた。また、国立民族学博物館に勤務する氏は、異文化の表象や理解、それに関わる博物館の機能についても先鋭的な議論を展開してきた。その成果が「異文化へのまなざし」展であり、そして本書である。

欧米で、また日本で、美術館や博物館がいかに異文化を展示し、その理解を権威づけてきたのか。そうした文化表象のあり方が、現在いかなる批判にさらされているのか。そして、美術館や博物館はその批判をどのように乗り越えようとしているのか。こうしたスケールの大きな問題に本書は正面から対峙し、説得的な答えを導き出している。

本書はアフリカを直接論じたものではないが、私はアフリカに関わる人には是非読んでほしいと思う。今日なおアフリカは異文化の代名詞のように扱われることがしばしばだが、本書はそこにいかなる権力関係がつかまとうのかを具体的に教えてくれる。同時に本書は、異文化の表象と理解が先進国からアフリカへの一方的な権力行使ではなく、双方向の交流過程であることにも気づかせてくれる。「オリエンタリズム」批判のなかで萎縮せずに、われわれはもっと楽しんで異文化に接すべきなのだ。第22回サントリー学芸賞受賞。

(武内進一)

松田素二著 抵抗する都市——ナイロビ 移民の世界から 東京 岩波書店 1999年 282p.



本書の著者松田素二氏は、この数年の間、ナイロビの移民街に暮らす人々の日常の微細な生活実践を抵抗として位置づけることを出発点として、近代以後の世界における支配原理の解明と、フィールドで出会う人々の主体性の理論化に努めてきた。この問題を扱った既発表論考を下敷きとして、理論面に重点を置いて書き直されたものが本書である。

これまでややおぼろな感のあった著者の抵抗論の全体像が、本書によって明確に提示されたといえる。評者の理解に従ってその骨子を乱暴に整理すれば、(1)まず抵抗概念は、世界システム、市民社会原理、近代合理精神といった「支配原理」に即応して必然的に「抵抗」の契機が生ずるのだという巨大な枠組みのなかで理論的に定位されるということ、(2)それゆえ、周縁都市における生活互助講、民族アイデンティティの変換、キリスト教の土着化、都市暴動、定型化された語りといったものが「抵抗」実践として同列に論じうるのだということ、(3)さらに、抵抗概念は、調査者と被調査者を「支配原理に抵抗する同時代の共同実践者」として同じ足場に置くことを可能にするため、民族誌とフィールドワークの将来像を再構築する出発点ともなりうるということ、となる。

このきわめて理論的な書物の副題において、著者の学問的母胎たる「ナイロビ移民の世界」が言及されていることは意味深長である。これはたんに、フィールド科学たる人類学の自己確認としてでなく、具体的な事例研究を踏まえた応答（あるいは批判）を要請する、読者へのメッセージとしても読める。今後おそらく著者の理論枠組みを下敷きとした民族誌が日本のアフリカ研究の場で次々と生み出される予感がする。またその一部は、都市暴動や自発的結社の事例を媒介項として、政治分野での民主化研究と呼応して政治主体の生成の問題へも展開していくのではないか。著者の表現に言う「ハードでマクロでホモジニアス」な支配形態をもつばらの研究対象とする評者にとって、松田氏の理論体系へ何らかの応答を行うことは宿題である。

(佐藤 章)

岡安直比著 みなしごゴリラの学校 東京 草思社 2000年 254p.



本書はアフリカの野生動物の代表格である「サル」、その中でも一番大型の「ゴリラ」を育てた人間の物語である。著者は、ビッグミーンパンジーの観察のためザイール（現コンゴ民主共和国）に滞在する予定であったが、政情不安定であきらめざるをえず、隣国コンゴ共和国の「ゴリラ孤児院」に参加することになる。「野生のサル」の調査のつもりが、ゴリラの孤児を「育てて」自然に帰すプロジェクトに参加することになった著者ははじめとまどいを隠せない。けれども、アフリカに行けばという思いで、娘さん（当時6歳）ともどもコンゴに渡ることになる。

「ゴリラ孤児院」というのは、いったい何のことだろう。自然保護に関わると必ず出てくる社会問題が密猟であるが、ワシントン条約も知らない人に自分の家の裏の森で動物を狩るのがなせいけないかを理解してもらうのは難しい。経済的な理由もあるので、密猟はあとを立たない。それを取り締まって、獲物を没収するのだが、役人たちが頭をかかえてしまったのが、生きた類人猿の赤ちゃんであった。そこで、孤児となった赤ちゃんたちを保護するプロジェクトがいくつかできることになった。著者が関わったのは、イギリスの私立動物園ハウレットがコンゴ政府と共同で進めているものである。類人猿のなかでも、ゴリラは特にデリケートで、ストレスをためやすく、親を目の前で殺された痛手は大きく、育て上げるのはとても難しい。赤ん坊期も長く、健康であっても3年ぐらいの期間は母親が（孤児院では母親代わりの人間が交代で）24時間抱っこしていなければならない。そのゴリラたちを著者は人間に対すると同じ視線でみている。ゴリラの内面分析がとてもの確で、「ヒト」である読者は知らず知らずのうちに自分の性格や、社会生活と比べながら読むことになる。人間社会の貧困と政治不安が解消されないかぎり、ゴリラの孤児はまた増え続けるのである。

(鈴木陽子)

ティス・ゴールドシュミット著
(丸武志訳) **ダーウィンの箱庭**
ヴィクトリア湖 東京 草思社
1999年 358p.

東アフリカのヴィクトリア湖に「フル」と呼ばれる小さな魚が息している。日本で見ようと思ったら、水族館の熱帯雨林コーナーあたりをずいぶん探すしかない。たとえ見つけたとしても、ピラニアや鉄砲魚、巨大なピラルクといった派手な主役たちに挟まれて、ほとんどその存在感はない。ところが、このいたって地味な、見物しがないの魚に、生物としてのたいへんな力が秘められているらしい。50年に1種以上というハイペースで新種が生まれるため、通常は何万年も要するといわれる進化の過程が、フルの場合はほとんど日常のレベルで観察できるというのである。

その進化ぶりを目の当たりにしたオランダ人動物学者が著したのが本書である。彼がタンザニアに滞在したのは1980年からの5年間。その間にヴィクトリア湖のフルは見事に新種を誕生させた上、種の絶滅さえ「実演」してみせたという。全編にわたって驚きと知的興奮に満ちあふれる本書は、分類学から分子生物学、魚類生態学にわたる専門的知識に支えられているものの、いくつもの用語解説のコラムが配置されていて、分かりやすい。しかも、著者の手にかかると、調査報告は学術的な無味乾燥から解き放たれ、卓越した紀行文になる。たとえば、標本の採取にとりかかるシーン。

「網はゆっくり水中に没して、見えなくなった。プラスチックの赤い浮きが三個、木製の船の40メートルほど後ろにひょいと浮き上がった。ムホジャは、(中略)わたしに目で合図をうながした。わたしは空中に円を描く」。

出版元のオランダで文学賞の最終選考に残ったというのもうなずける。読者は、一方では進化についての学術的発見に目を見張りつつ、他方では、著者とともに友人兼助手のムホジャらと言葉を交わし、タンザニアでの長い旅路に行くような心地を味わうことになる。科学書であって科学書にとどまらない、読む楽しみにあふれた作品である。

(津田みわ)



青木澄夫著 **日本人のアフリカ**
「発見」 東京 山川出版社
2000年 268p.

世界がインターネットで繋がれ、各地のニュースがほぼリアルタイムで手に入り、24時間あればほとんどの国に行くことができる現代にあっても、多くの日本人にとってアフリカは「遠い」大陸である。本書は、現代と違ってはるかにアフリカに行くことが困難であった明治から昭和初期にかけての日本人のアフリカ交流について丹念に調べ上げ、読者の想像以上に活発であった民間レベルでの交流を掘り起こすことによって、「アフリカをよりいっそう身近なものにする」(「あとがき」p.265) ことに成功している。著者は、『アフリカに渡った日本人』(時事通信社 1993年)において数人の日本人を取り上げ、彼/彼女たちがアフリカで過ごした様子を生き生きと描いたが、本書ではより網羅的に初期のアフリカ交流史について整理するとともに、その背景として当時の日本におけるアフリカ(人)に対する意識や関心についても紹介されており、より広がりのある内容となっている。

アングロ・ズールー戦争の様子が日々新聞で報道されていたこと、明治後期から東アフリカへの移民の要望が高まっていたこと、大正時代にはすでにダーバンまでのアフリカ航路が開通されていたこと、エチオピア・イタリアの紛争に際してエチオピアを支援する世論があったことなどが著者によって紹介されていくが、ふんだんに使われた写真と当時の報道の様子に、読者は日本とアフリカの結びつきの意外な深さを感じさせられるであろう。

入手困難なものを含めて非常に多くの資料が掘り起こされており、初期のアフリカ交流史に関するほとんどの文献について触れられていると思われる。また、取り上げた人物の子孫にもインタビューが行われており、精力的な研究姿勢には頭が下がる思いである。こうした研究姿勢の背後に、「遠い」アフリカを身近な存在に引き寄せ、日本におけるアフリカ理解の促進、人種差別の解消を願う著者の熱い思いが強く感じられる。巻末の文献リストに、紹介された文献の一部しかまとめられていないことがやや残念に思われる。

(福西隆弘)

